

中久世遺跡発掘調査概報

平成元年度

京 都 市 文 化 観 光 局

序

京都市は、あと4年後に建都1200年という輝かしい節目の年を迎えようとしております。

ひとくちに1200年といっても、幾多の歴史がこの都市を変貌させてゆきました。

我々が学ぶ日本史の教科書には、必ずいくつかの大きな事変がこの京都で発生し、そして全国に影響を与えたことが記されています。

京都市内は、遙か平安建都以前より多くの人々が定住し、永々として生活を営み続け、それを礎にして都が造営されたといっても過言ではありません。

平安京跡など市内に存在する数多くの遺跡は、京都の持つ永い歴史の一端を明らかにする重要な埋蔵文化財であるばかりではなく、日本の歴史を正確に伝えてくれる国民的な文化遺産でもあります。

これらの遺跡を考古学的に調査し、その成果を紐解くことによって、過去の史実を具体的な形で解明してゆくことが可能となるのではないのでしょうか。

この報告書は、京都市が昭和63年度及び平成元年度に、文化庁国庫補助を得て(財)京都市埋蔵文化財研究所に委託し実施いたしました京都市内埋蔵文化財の調査報告書であります。

調査を担当された方々やご指導いただいた先生方、そして協力いただきました方々に心より厚く感謝するとともに、本書が少しでも京都の歴史を知るための資料として皆様のお役にたてれば幸と存じます。

平成2年3月

京都市文化観光局

例 言

- 1 本書は、京都市文化観光局が財団法人京都市埋蔵文化財研究所に委託して実施した、文化庁国庫補助を伴う、平成元年度の中久世遺跡発掘調査の概要報告書である。
- 2 調査地は京都市南区久世中久世町4丁目10番地である。
- 3 発掘調査は財団法人京都市埋蔵文化財研究所調査員吉崎伸が担当し、同補佐員出口勲、補助員木下秀一・小寺末之が参加した。
- 4 本書で使用した地図は、京都市発行の1/2500都市計画基本図を調整使用した。
- 5 本書で使用した方位は、平面直角座標系VIに、また、標高はT.P.によった。
- 6 写真は遺構・遺物ともに同研究所村井伸也が撮影した。
- 7 本書は吉崎伸が執筆・編集を担当した。

本 文 目 次

第I章 調査経過	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査経過	2
第II章 遺 構	2
第1節 層 序	2
第2節 遺 構	3
第III章 遺 物	6
第1節 土 器	6
第2節 石器・土製品	8
第IV章 ま と め	10

図版目次

- 図版1 遺跡 弥生～古墳時代遺構復元図
- 図版2 遺跡 遺構実測図
- 図版3 遺跡 遺構実測図
- 図版4 遺跡 遺構実測図
- 図版5 遺跡 遺構実測図
- 図版6 遺跡 遺構実測図
- 図版7 遺物 土器実測図
- 図版8 遺物 石器・土製品実測図
- 図版9 遺跡
 - 1 調査区全景（弥生～古墳時代 北から）
 - 2 1号住居（北西から）
- 図版10 遺跡
 - 1 2号住居（南東から）
 - 2 3号住居（北西から）
- 図版11 遺跡
 - 1 4号住居（北西から）
 - 2 2号住居中央土壙遺物出土状況（南東から）
 - 3 3号住居炉跡（北東から）
- 図版12 遺跡
 - 1 調査区全景（奈良～平安時代 北から）
 - 2 建物1（北から）
- 図版13 遺跡
 - 1 建物2ほか（北から）
 - 2 柵列2（南東から）
 - 3 溝1（北から）
- 図版14 遺物 出土土器
- 図版15 遺物 出土土器
- 図版16 遺物 出土石器・土製品

插图目次

图 1	调查位置图	1
图 2	调查区配置图	2
图 3	东壁断面图	2
图 4	土壤 1 实测图	3
图 5	栅列 2 实测图	5

第I章 調査経過

第1節 調査に至る経緯

当調査地一帯は中久世遺跡に該当している。中久世遺跡は縄文時代から中世に至る複合遺跡で、これまでに弥生時代の方形周溝墓や河川、奈良時代から室町時代の建物や井戸など多くの遺構を検出しており、それぞれの遺構からは土器・石器・木器などの豊富な遺物も出土している。京都市内でも重要な遺跡の一つである。

当地は現在まで駐車場として利用されていたが、今回新たに事務所が建設されることになった。ここは昭和57年度、既に、駐車場造成工事に先立って試掘調査を実施して^{註1}おり、
堅穴住居跡・柱穴・溝などを地表から比較的浅いところで確認していた。従って、建設工事に伴い、これらの遺構が破壊される恐れが生じたため、事前に発掘調査を実施する運びとなった。

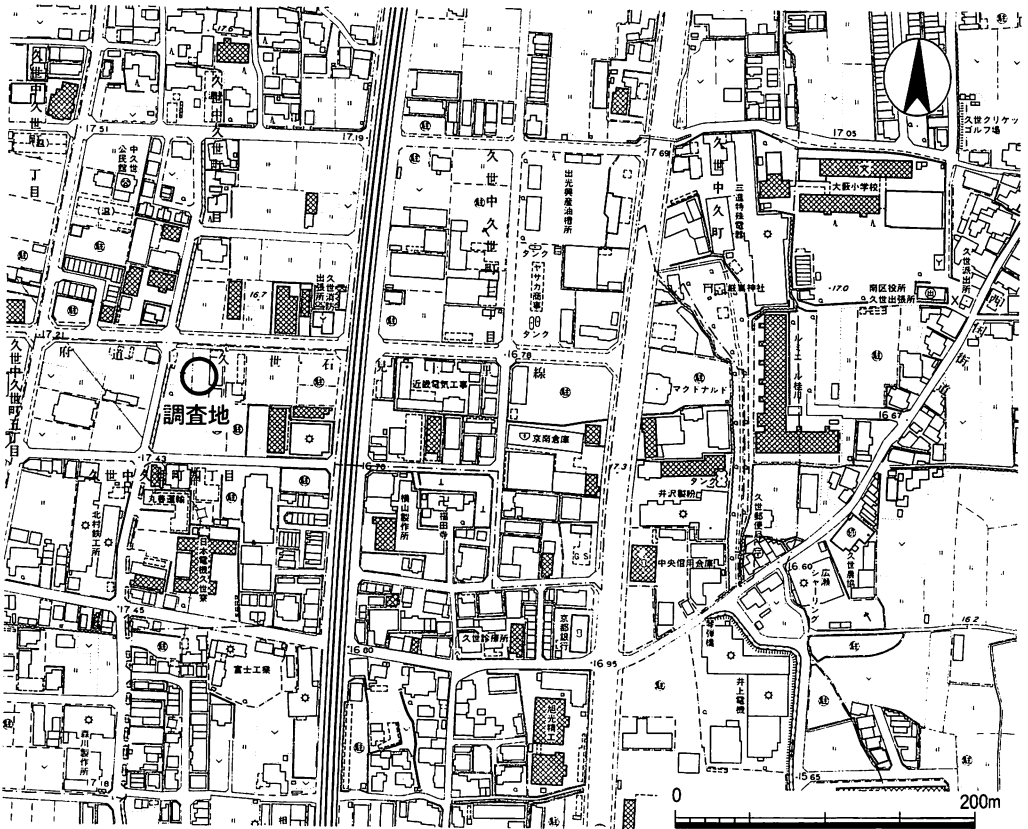


図1 調査位置図(1:5000)

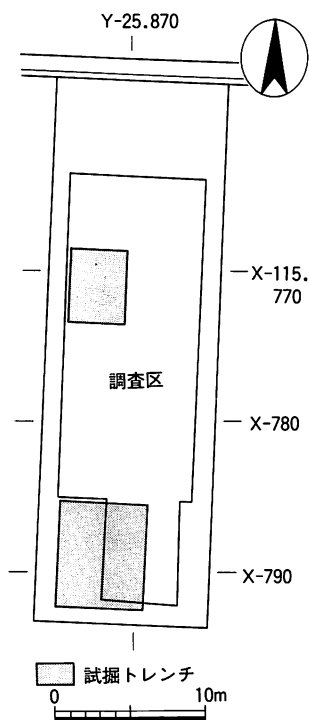


図2 調査区配置図(1:500)

第2節 調査経過

まず、調査は建物基礎で破壊される予定の部分を中心に、東西9m・南北23.4mの長方形の調査区を設定することから開始した。その後、調査に不必要な盛土・耕土などを、重機を用いて掘削し、搬出した。

遺構は竖穴住居・掘立柱建物・柱穴・土壇などを同一面で重複した状態で検出した。これらは掘立柱建物と竖穴住居がそれぞれ別の群となっており、時期的に掘立柱建物群が新しいと理解できた。したがって、調査・記録を2回に分けて、掘立柱建物群から順次実施した。その後、調査区外に延びる可能性のある遺構を追及するために、再び重機を投入して調査区の南側の一部を拡張した。ここでは新たに東西方向の溝などを検出し、これらを調査・記録した。

最終的には調査によって生じた排土を重機を用いて整地し、調査を終了した。

第II章 遺 構

第1節 層 序

調査区内の基本層序は上から、アスファルト舗装(約5cm)・盛土(50~60cm)・旧耕土(約20cm)と続き、そして、黄褐色砂泥層 [2.5Y5/4] の地山となる。ただし南部には地山上に、にぶい黄褐色砂泥層 [10YR5/3] が分布する。地山面の地形は北側が最も高く標高16.7mを測り、南方へわずかに傾斜しており南端で16.5mである。

今回、すべての遺構は黄褐色砂泥層(地山)の上面で検出した。地山面は、全体にかなり削平をうけており、特に南部が著しい。したがって、南部ほど遺構の遺存状況は悪い。

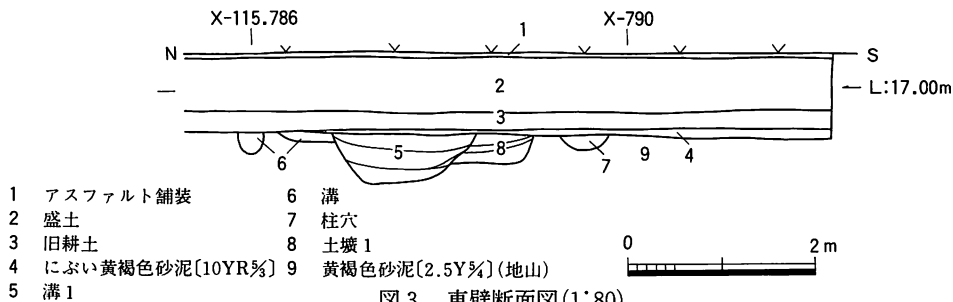


図3 東壁断面図(1:80)

第2節 遺 構

検出した遺構は竪穴住居、掘立柱建物、柵列、土壇、溝のほか、多数の柱穴があり、時期的には弥生時代から平安時代までに及ぶ。しかし、これらすべての遺構を同一面で検出したため、柱穴や土壇などに関しては直接の重複関係や出土遺物などの手掛かりがなく、時期が明確にできないものも多い。

弥生時代の遺構は、調査区の南半を中心に中期から後期の土壇(土壇1)・柱穴など小数を確認している。柱穴の掘形は直径30cm程度の円形で、深さ40~50cmと、径の割に深いものが多い。これらの中には削平を受けた竪穴住居の残欠と考えられるものもある。

古墳時代の遺構は、調査区の全域にわたって前期[庄内併行期]の竪穴住居4棟(1~4号住居)を検出した。このほかにも、やはり削平を受けた竪穴住居の残欠と考えられる柱穴、土壇がある。これらは竪穴住居によって構成される大規模な集落の一部であるらしい。

奈良時代の遺構は中期から後期にかけての掘立柱建物3棟(建物1~3)、柵列2列(柵列1, 2)からなる建物群のほか、多数の柱穴、土壇などを検出している。この時期の遺構は調査区の中央部から南側に分布しており、土地利用に計画性があったことを窺わせている。建物群は方位の違いから、さらに二時期に細分できると考えられる。すなわち、傾きの大きい建物3、柵列1のグループと傾きの小さい建物1・2、柵列2のグループである。時期的には前者が先行すると考えられるが、直接の重複関係はなく、比較検討できる遺物も少ないために確証は得られなかった。

平安時代の遺構は、後期の溝を調査区の南部で一条検出している。このほかに柱穴、土壇などが小存在する。

弥生時代の遺構

土壇1(図4) 調査区の南部で検出した。北側を後の遺構に壊されており、南半部幅約80cm、深さ30cmのみが残存している。本来は楕円形を呈していたものと考えられ、長さ1m程度と推測できる。埋土には多量の炭化物を含んでおり、また、弥生土器の壺や甕の体部の大型破片が多く出土している。こうした状況から、この土壇を竪穴住居に伴う貯蔵穴ではないかと考えている。

古墳時代の遺構

1号住居(図版四上・九-2) 調査区の北東部で検出した隅丸方形の住居跡で、東側の一部はさらに調査区外に延びる。規模は一辺約4.

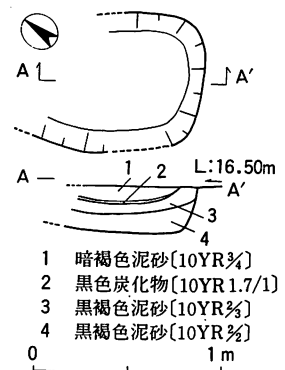


図4 土壇1実測図(1:40)

7m、床面までの深さは約5cmを測る。方位は北で東へ大きく振れている(N-43°-W)。覆土には全体に暗褐色泥砂層が堆積し、土器片・焼土・炭化物を含んでいる。支柱穴は4箇所であると考えられ、内3箇所を確認した。柱掘形はいずれも円形で径約30cm、深さ30cmで、各柱間の距離は約2.7mを測る。住居の内部施設としては周囲に壁溝が巡り、中央に炉跡、そして東辺に土壇がある。壁溝は幅約20cm、床面からの深さ6~10cmで住居を全周するものと考えられる。炉跡は円形で径70cm、深さ30cmを測り、周辺の一部が焼けている。また、東辺の土壇はやや歪な方形で一辺約80cm、深さは30cmを測る。遺物は土器片が覆土中から出土しているがいずれも小片で保存状況も悪い。

2号住居(図版四下・十一-1・十一-2) 調査区の中央部西側で検出した方形の住居跡で、西側の一部はさらに調査区外に延びる。規模は一辺約4.8m、深さは約10cmを測る。方位は1号住居とほぼ同じく北で東に大きく振れる。覆土はオリーブ褐色砂泥層が全体に堆積しており、炭化物・土器片などを多く含んでいる。支柱穴は4箇所であると考えられ、内3箇所を確認した。柱掘形はいずれも円形で径約30cm、深さ50cmで、各柱間の距離は約2.7mを測る。住居の内部施設としては周囲に壁溝が巡り、中央に土壇がある。壁溝は幅20~25cm、床面からの深さは約10cmで住居を全周するものと考えられる。土壇はややひずんだ円形で径約110cm、深さ10cmある。ここからは土師器の壺・甕・高杯などが一括で出土している。

3号住居(図版五上・十一-2・十一-3) 調査区の中央部東側で検出した方形の住居跡であり、東側の一部はさらに調査区外に延びる。規模は一辺約5.1mである。住居の上部は、ほぼ床面の高さまで削平されているため覆土はない。方位は1・2号住居とほぼ同様に北で東に大きく振れる。支柱穴は4箇所を確認した。柱掘形はいずれも径30cm前後の円形で、深さは30~50cmを測る。各柱間の距離は約2.8mである。内部施設としては周囲に壁溝が巡り、中央に炉跡と南端に土壇がある。壁溝は幅約20cm、深さ10cmで住居を全周するものと考えられる。炉跡は径約50cmの円形で、深さは20cmを測り、周囲がよく焼けて赤褐色を呈している。土壇は長さ2.5m、幅70cmの楕円形で、深さは50cmを測り住居の壁に接している。遺物は土器片やサヌカイトの剥片が炉跡や土壇からわずかに出土しているに過ぎない。

4号住居(図版五下・十一-1) 調査区の南部で検出した隅丸方形と考えられる住居跡である。削平が激しいため北辺の一部が残存しているに過ぎないが、規模は一辺5m前後と推測できる。方位の振れは、ほかの住居より小さい(N-22°-W)。支柱穴は2箇所を確認したが、それぞれについて立て替えが認められる。柱掘形はいずれも径約30cmの円形で、深さは40cm前後である。柱間の距離は約2.5mである。内部施設としては周囲に壁溝が巡り、

北端に土壌がある。壁溝は保存状態の良いところで幅約15cm、深さ8cmを測る。土壌は長径130cm、短径70cmの楕円形で、深さは約20cmを測る。遺物は土器片が土壌などから少量出土している。

奈良時代の遺構

建物1(図版六上・十二-2) 調査区の中央部で検出した東西建物である。規模は東西4.5m(3間5尺平均)、南北3.6m(2間6尺平均)を測る。柱掘形は一辺60~80cmの方形で、深さは20~30cmを示し、北側柱列の西側3箇所には柱の抜き取り痕が認められる。方位は北で西へわずかに振れている(N-4°-E)。

建物2(図版六左下・十三-1) 調査区の中央部西側で検出した東西建物であり、西側はさらに調査区外に延びる。規模は東西1.8m(1間6尺)以上、南北3.3m(2間5.5尺平均)である。柱掘形は一辺60~80cmの方形で、深さは20~40cmとややばらつきがある。方位は北で西へわずかに振れ、建物1とほぼ同じ傾きを示す(N-4°-E)。

建物3(図版六右下) 調査区の南西部で検出した東西建物で、西側は調査区外に延びる。規模は東西2.4m(1間8尺)以上、南北3.9m(2間6.5尺平均)である。柱掘形は一辺30~50cmの方形で、深さは10~20cmである。方位はほかの建物よりやや大きく振れている(N-9°-E)。

柵列1 建物3の東側で検出した南北柵列である。総長8m(5間)を検出した。柱掘形は一辺60~90cmの方形を呈し、深さは20~40cmである。それぞれに1から2回の建て替えが認められる。方位は建物3とほぼ同じで北で西へやや大きく振れている(N-9°-W)。

柵列2(図5・図版十三-2) 建物1の南側で検出した特殊な南北柵列である。総長5.1m(3間)を検出した。柱掘形はいずれも北西から南東に延びる楕円形を呈し、長径約130cm、短径50cmである。この北西の端をさらに一辺40~60cmの方形に掘り込み、ここに柱を立てている。深さは南東端は5~10cmと浅く、北西へ向かって20~30cmと徐々に深くなり、掘り込みの部分では40~50cmとなる。柵列の方位は建物1・2とほぼ同じ振れを示している(N-4°-E)。

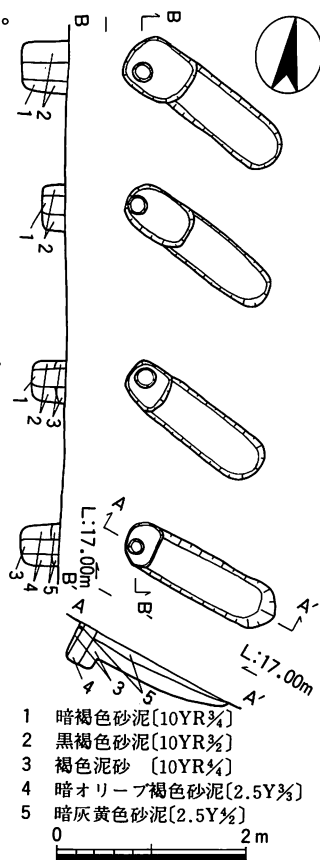


図5 柵列2実測図(1:80)

平安時代の遺構

溝1(図版十三-3) 南側拡張区で検出した素掘の東西溝である。幅約150cm、深さは50cmで断面は逆台形を呈する。方位は、ほぼ真東西に近い。埋土は大きく3層に分れ、中層の灰黄褐色砂泥層からは土器、瓦類が出土している。

第三章 遺 物

第1節 土 器

今回の調査では遺物が整理箱に12箱出土が、その大半が土器類である。土器は弥生時代から平安時代までのものが出土しており、弥生土器・土師器・須恵器・黒色土器・緑釉陶器・瓦器などの器種が出土している。

弥生時代の土器は、主に中期から後期の弥生土器が土壇、柱穴などから出土しているが、その量は少ない。器形には壺・甕がある。

古墳時代の土器は、前期の古式土師器が竪穴住居、土壇などから出土しており、今回の調査では最も量が多い。器形には壺・甕・高杯・器台などがあり、バリエーションも豊富である。後期には須恵器の杯身・高杯などが認められるが、いずれも小片で量も少ない。この中で2号住居からは前期〔庄内併行期〕の土器が良好な状態で一括出土している。

飛鳥時代の土器は、須恵器をわずかに確認しているに過ぎず、器形も杯蓋がみられるのみである。

奈良時代の土器は主に中期から後期の土師器と須恵器が、建物柱穴・土壇などから出土している。量は古墳時代に次いで多いが、いずれも小片で保存状態はよくない。また、土師質の製塩土器も比較的多く出土している。

平安時代の土器は前期から中期の土師器・須恵器・黒色土器・緑釉陶器が柱穴などから小片がごくわずかに出土している。また、後期の土師器・須恵器・瓦器が溝1からやや多く出土している。

弥生時代の土器(図版七・十五-1~4)

弥生土器 甕(1,2)は中期〔Ⅲ様式〕に属する。共に口縁部は外上方へ「ハの字」に開くが、(1)はゆるやかに湾曲するのに比べて(2)は鋭く屈曲する。端部は面をなし、(2)はここに刻み目を施す。口縁部から体部外面はタテハケ、内面はナデである。口縁端部はヨコナデで、(1)は内面にヨコハケを施す。いずれも器壁は薄く、丁寧な作りである。(1)は土壇1、(2)は柱穴2から出土した。

壺(3,4)は後期[V様式]に属すると考えられる。(3)の頸部は外上方に立ち上がり、口縁部は大きく外反する。端部は上下に拡張して外側に面を作り、ここに斜めの刻み目を施す。(4)は大型の壺で、頸部は外上方に立ち上がり、口縁部は大きく外反する。端部は下方に拡張して外側に面を作り、ここに凹線文を施し、その上に5個を1単位とした円形浮文を付ける。また、円形浮文の各单位の間には2本の棒状浮文をつけていた痕跡が残っている。(3,4)共に頸部から口縁部にかけてナデている。(3)は奈良時代の遺構に混入して、(4)は柱穴1から出土している。

古墳時代の土器(図版七・十四-5~15)

古式土師器 甕(5~9)(5~8)の体部は丸みをもち、口縁部は外上方に「ハの字」に開き、端部は丸く収めている。(8)にはやや大きめの平らな底部がつく。いずれも口縁部はヨコナデで、体部内面はナデである。(5,6)の体部外面は不明であるが(7,8)の上半はヨコハケ、(8)の下半はタテハケである。(9)はいわゆる近江地方の影響を受けた土器で、外上方に開いた口縁の端をさらに上方に立ち上げた「受け口」状を呈しており、外側には櫛描列点文が施されている。口縁部はヨコナデ体部は不明である。

壺(10~12)(10)の底部は中央がわずかに窪んだ平底で、体部はやや肩の張る球形である。頸部から口縁部はほぼ直立し、端部は丸く収めている。口縁部から底部までの外面はタテハケ、口縁部から体部上半の内面はオサエ、体部下半から底部内面は斜方向のハケである。(11)の体部はやや下ぶくれの球形で、口縁部は大きく外反し、端部は切り落としたように面を作る。口縁部はヨコナデ、体部外面はナデ、内面はオサエである。(12)は大型で体部は丸い。口縁部は外反した口縁の端をさらに立ち上げた「受け口」状を呈しており、端部は丸みをもって収められている。口縁部はヨコナデ、体部内面はオサエ、外面は不明である。

高杯(13~15)いずれも杯部は丸く、口縁部は大きく外反し、端部は丸く収めている。口縁部はヨコナデ、杯部内外面はナデである。

これらは全て2号住居に伴う土器で、(7,8,10,12~15)は中央土壇、(11)は床面直上、他は覆土から出土している。

飛鳥時代の土器(図版七・十五-16,17)

須恵器杯蓋(16,17)(16)は天井部から口縁部にかけて丸みを持ち、端部は丸く収めている。口縁の内側には退化した断面三角形でやや内湾気味の受け部がついている。(17)の天井部は平らで、口縁部はやや屈曲し、端部は下方につまみ出している。口縁の内側には退

化した受け部がつき、断面は薄くて外反している。いずれも、天井部に宝珠形つまみがつくと考えられる。天井部外面はヘラケズリの後ナデ、他はロクロナデであり、天井部内面の中央付近に不定方向のナデが認められる。(16)は排土から、(17)は奈良時代の遺構に混入して出土している。

奈良時代の土器(図版七・十五-18~24)

土師器 杯(18)は奈良時代のものである。底部から口縁部にかけて内湾気味に立ち上がり、端部は外反し、丸く収めている。底部外面はオサエ、内面はナデ、口縁部はヨコナデである。建物2の柱穴から出土している。

須恵器 杯蓋(19~21)の天井部は平で、口縁部は屈曲し、端部は下方につまみ出している。(20)はややかさだかである。(21)には天井部にやや偏平な宝珠形つまみがつくが、他の二つにも同様なつまみがつくと考えられる。天井部外面はヘラケズリの後ナデ、ほかはロクロナデである。また、天井部の内面中央には不定方向のナデが認められる。(19)は柱穴7、(20)は建物2、(21)は建物1の柱穴から出土している。

杯(22~24)は高台のあるもの(22)と、ないもの(23,24)がある。(22)の底部は平で、低い高台が外端からやや内側につく。口縁部は外上方へ直線的に開き、端部は丸く収める。高台のない杯(22,23)には口径の大小があるものの、いずれも底部は平らで、口縁部は外上方へ直線的に開き、端部は丸く収めている。底部外面はヘラケズリの後ナデで、ほかはロクロナデである。(22)は柱穴8、(23)は柱穴10、(24)は柵列2の柱穴から出土している。

平安時代の土器(図版七・十五-25)

瓦器 椀(25)は平安時代後期のものである。内湾しながら立ち上がる口縁部が残存しており、端部は丸く収め、内側に一条の沈線が巡る。内面は密に横方向のミガキを施し、外面は周囲を3~4分割した横方向の粗いミガキが施される。溝1から出土している。

第2節 石器・土製品(図版八・十六)

土製品としては土錘が、石器としては石鏃・石槍・石剣・石錐・石斧・石庖丁のほか砥石がある。今回出土した石器は破損しているものが多く、出土状態からみても本来の遺構に伴っているものは少ないと考えられる。いずれも弥生時代中期以降のものであると考えられるが時期は明確にできなかった。

石鏃(1~3) 打製が2点、磨製が1点出土している。打製石鏃(1・2)は凸基無茎式石鏃で(1)は円基、(2)は尖基である。(1)は表裏共に細かい調整が加えられ丁寧仕上げられている。

るのに比べて、(2)は粗く両面に大剝離面を残している。共にサヌカイト製である。(3)は磨製の凸基式有茎石鏃の茎の部分であると考えられる。表裏、両側面共に研磨されており、全体に均一な薄い板状を呈する。粘板岩製である。(1)は2号住居覆土、(2,3)は柱穴4から出土している。

石槍(4) 打製石槍の先端に近い部分の破片である。両側から細かい調整が加えられ、刃部は丁寧に仕上げられている。断面は菱形を呈し、厚みがある。サヌカイト製である。2号住居の覆土から出土した。

石錐(5) 錐部と頭部の境が不明瞭なタイプである。頭部は表面だけに調整が施され、裏面は大剝離面のままである。錐部は両面から調整し、断面は三角形を呈する。使用痕が認められ、錐部の稜は摩滅し、一部は欠損している。サヌカイト製である。2号住居の覆土から出土した。

石斧(6~8) いずれも磨製偏平片刃石斧であるが、大(8)、中(7)、小(6)がある。(6)は側辺がほぼ平行であり、(8)は側辺の一部が残存しているに過ぎないが同様であると考えられる。これに対して(7)は中程から刃部に向かってややすぼまり気味である。いずれも、体部は丁寧に研磨し調整しているものの、部分的に打撃によって整形をした際の剝離面をとどめている。刃部は片側から大きく研ぎだされているが、先端部の鋭さを増すためか裏側からもわずかに研磨している。また、刃部には使用痕とみられる刃こぼれや欠損が認められる。粘板岩製である。(6)は2号住居の覆土、(7)は柱穴3、(8)は排土中から出土している。

石庖丁(9~11) 磨製石庖丁が3点出土しているが、いずれも破損している。(9)は体部に紐穴の一部が残存しており、その位置から見て幅はやや狭いタイプであると考えられる。穴は両面から穿たれており、ほぼ中央で結合する。刃部は片刃で、わずかに内湾し、かなり摩滅している。(10,11)は体部の幅は広く、半月状を呈すると考えられる。体部の背に近い部分には二つの紐穴が(9)と同様に穿たれている。刃部は片刃で、ほぼ直線的である。いずれも粘板岩製である。(9)は2号住居の覆土、(10)は建物1の柱穴、(11)は4号住居の北土壌から出土している。

石剣(12~17) いずれも磨製石剣の破片と考えられる。(12)は先端に近い部分の未製品である。表裏から打撃を加えて大まかに整形し、一部を研磨しかけたところで放棄している。(13)は剣身の破片で、研磨痕が認められる。(14,15)は柄から剣身にかけての部分であると考えられ、縦方向にいくつかの稜があり、角度を変えながら面的に研ぎだしている様

子が窺える。(16,17)は柄の部分の破片であり、共に斜めあるいは横方向の研磨痕が認められる。(17)の基端部は直角に断ち落としたように面を作っている。これらはすべて、粘板岩製である。(12,15)は2号住居の中央土壇、(13,14)は同じく覆土、(16)は柱穴6、(17)は柱穴5から出土している。

砥石(18,19) いずれも砂岩製であり、破損している。(18)はきめが細かく、(19)はやや粗い。(18)は断面が三角形を呈し、各面が使用されており、特に、表面はたび重なる使用のため窪んでいる。(19)は表裏および一方の側面が残存しており、やはり、各面ともに使用されている。(18)は柱穴6、(19)は2号住居の覆土から出土している。

土錘(20,21) いずれも土師質で、中程が膨らみ両端がわずかに細くなっている。縦方向に孔が貫通している。(20)は柱穴9、(21)は柱穴11から出土しており、奈良時代のものと考えられる。

第IV章 ま と め

今回の調査では、中久世遺跡の実体を知るうえで重要な数々の資料を得ることができた。ここでは、その主な成果と今後の課題についてまとめる。

最大の成果は、古墳時代の竪穴住居群が検出できたことである。京都市発行の遺跡地図^{註2}台帳によれば、中久世遺跡は集落跡に分類されている。その中で、弥生時代から古墳時代については、各種の遺構や遺物の発見が示されている。しかし、その遺構の多くは河川や溝で、遺跡の核となるべき住居跡の存在を明らかにすることができずにいたのである。それゆえに、竪穴住居群を検出し、集落の一端を知り得たことは中久世遺跡を再認識する契機となるものであるといえよう。

中久世遺跡の遺構配置状況を、これまでの調査成果と合わせて検討すると(図版一参照)、今回、住居群を検出したのは、遺跡の北西端に近い地点に当たる。ここは北西から南西方向に流れる数条の大規模な河川に挟まれた微高地の部分である。自然の水路を環濠として利用できる格好の地点であるといえよう。河川を挟んだ南側では、昭和57年度の調査で^{註3}弥生時代中期の方形周溝墓や土壇墓を検出している。時期的に今回の住居群とは若干の食い違いはあるものの、このあたりを集落の墓域であると推測することも可能である。

また、遺跡内を流れる数条の河川は、やがて大藪地区の久世中学付近で一つに合流し、向きを変えてさらに南流する。大藪遺跡や東土川遺跡の集落跡はこの河川の自然堤防上に営まれていると考えられる。同一水系沿いに営まれたこれらの遺跡との関係は興味深い今

後の課題である。

奈良時代の建物群を検出できたことも成果である。中久世遺跡ではこれまでも遺跡南部で建物や井戸を確認しており、かなり大規模な集落の存在が想定できる。この時期の集落は、乙訓地域一帯でも調査例が比較的少なく、重要な発見である。

当地の南側では平安時代の初期に長岡京が造営されており、こうした在地の集落にどのような影響があったのか興味深いところである。また、弥生時代以来の河川の一部はこの時期まで存在しており、下流の大藪遺跡では、河川内に大規模な「しがらみ」状遺構が作られている。^{註5} これらとの関連も今後明らかにする必要があるだろう。

平安時代の東西溝については、埋土の状況や出土した遺物から平安時代末期に埋没したことが明らかになった。当時、この地区一帯には乙訓郡の条里制が施行されており、調査区は十二条久世里二十二の坪に相当する。^{註6} 検出した溝の位置は条里区分に相当しないが、その方向や規模からみて何らかの関連性があるものと考えられ、注目できる。

遺物に関しては、出土量は少なく保存状況も良好とはいえない。その中では、石器は種類・量ともに比較的恵まれた。残念ながら、本来の遺構にともなうものは少なく時期が明確にできないものが多いが、大半は弥生時代の中期に属すると考えられる。この時期の集落が周辺に存在することを裏づける資料といえよう。

以上のように、近年の調査によって、中久世遺跡の実体はかなり明らかになってきた。しかし、ここで提示したいくつかの課題以外にも、多くの問題が山積されている現状である。従って、今後もこの地区は綿密な調査を継続する必要がある、特に、今後は現在抜け落ちている小規模な開発にも注意を向ける必要があるのではないだろうか。

註1 京都市文化観光局・叻京都市埋蔵文化財研究所『京都市内遺跡試掘立合調査概報』
昭和57年度 1983年

註2 京都市文化観光局『京都市遺跡地図台帳』 1986年

註3 叻京都市埋蔵文化財研究所『京都市域における埋蔵文化財の発掘・試掘・立合調査一覧』
1981年、1982年

註4 同上

註5 六勝寺研究会『大藪遺跡』 1972年

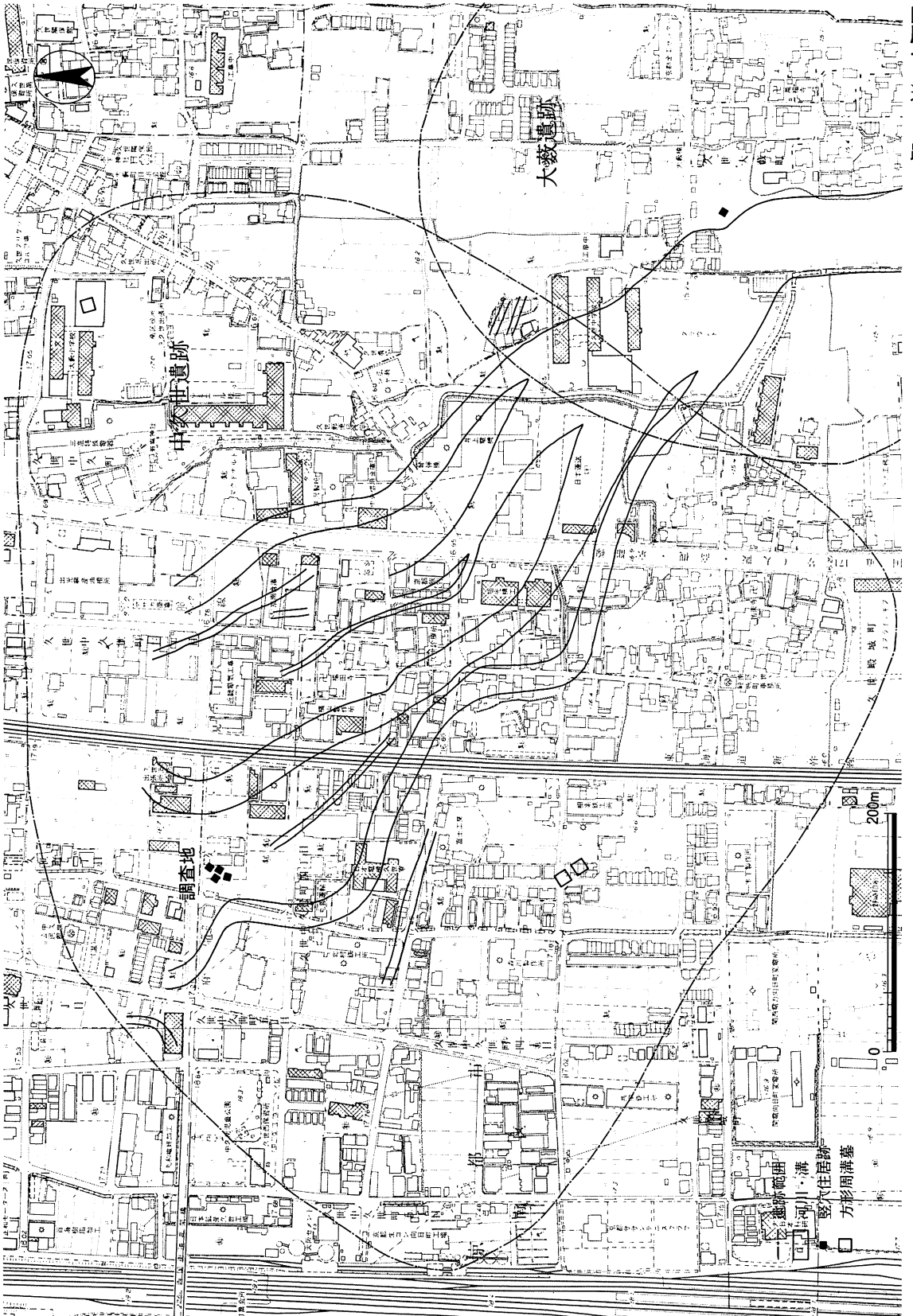
叻京都市埋蔵文化財研究所「大藪遺跡」『京都市埋蔵文化財調査概要』 昭和58年度 1985年

叻京都市埋蔵文化財研究所「大藪遺跡」『京都市埋蔵文化財調査概要』 昭和60年度 1988年

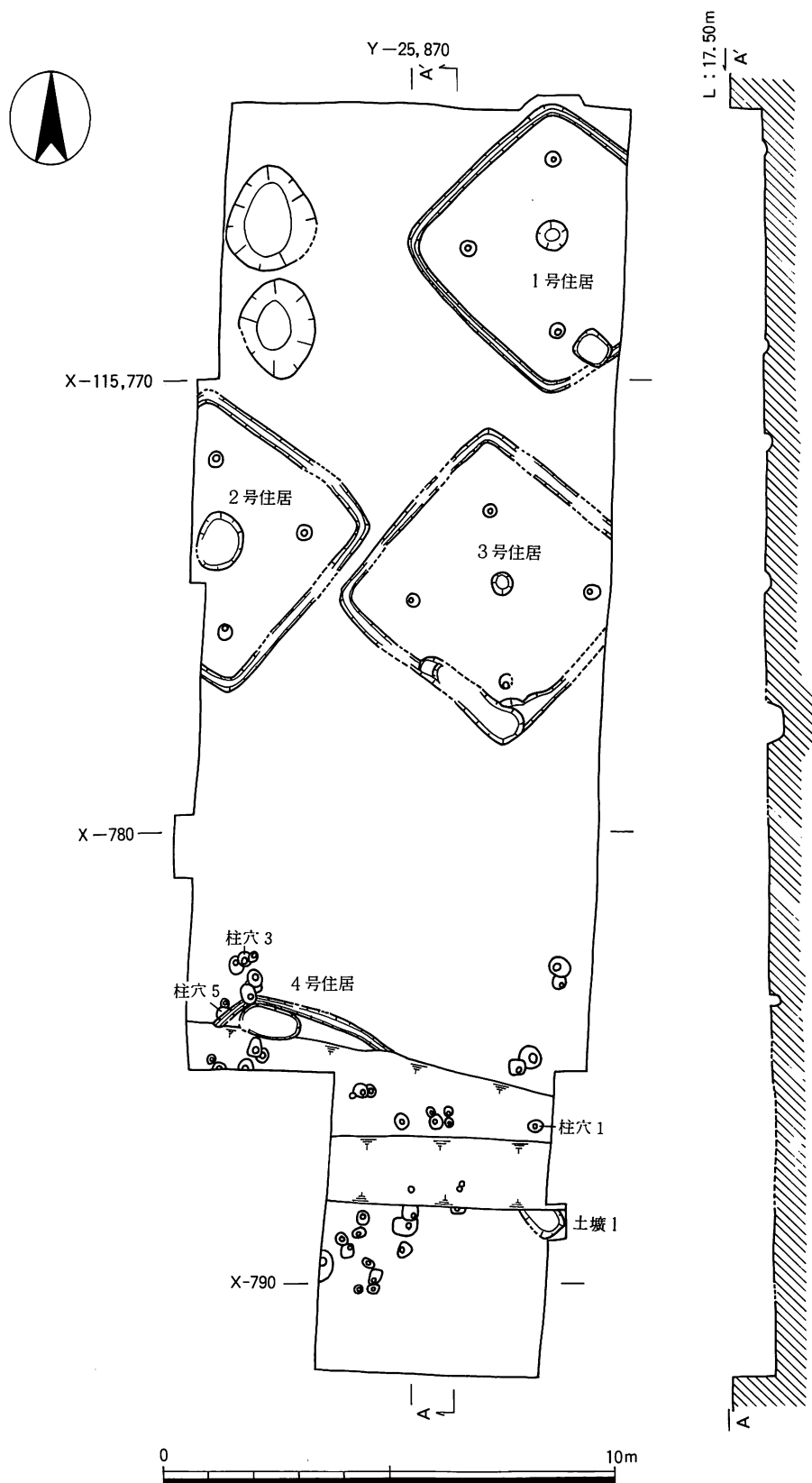
など

- 註6 金田章裕「乙訓の条里プランの完成と維持」『向日市史』上巻 1983年
百瀬ちどり「乙訓郡条里に付いての一考察—乙訓郡西部の条里をめぐって—」
『長岡京市文化財調査報告書』第12冊 1984年

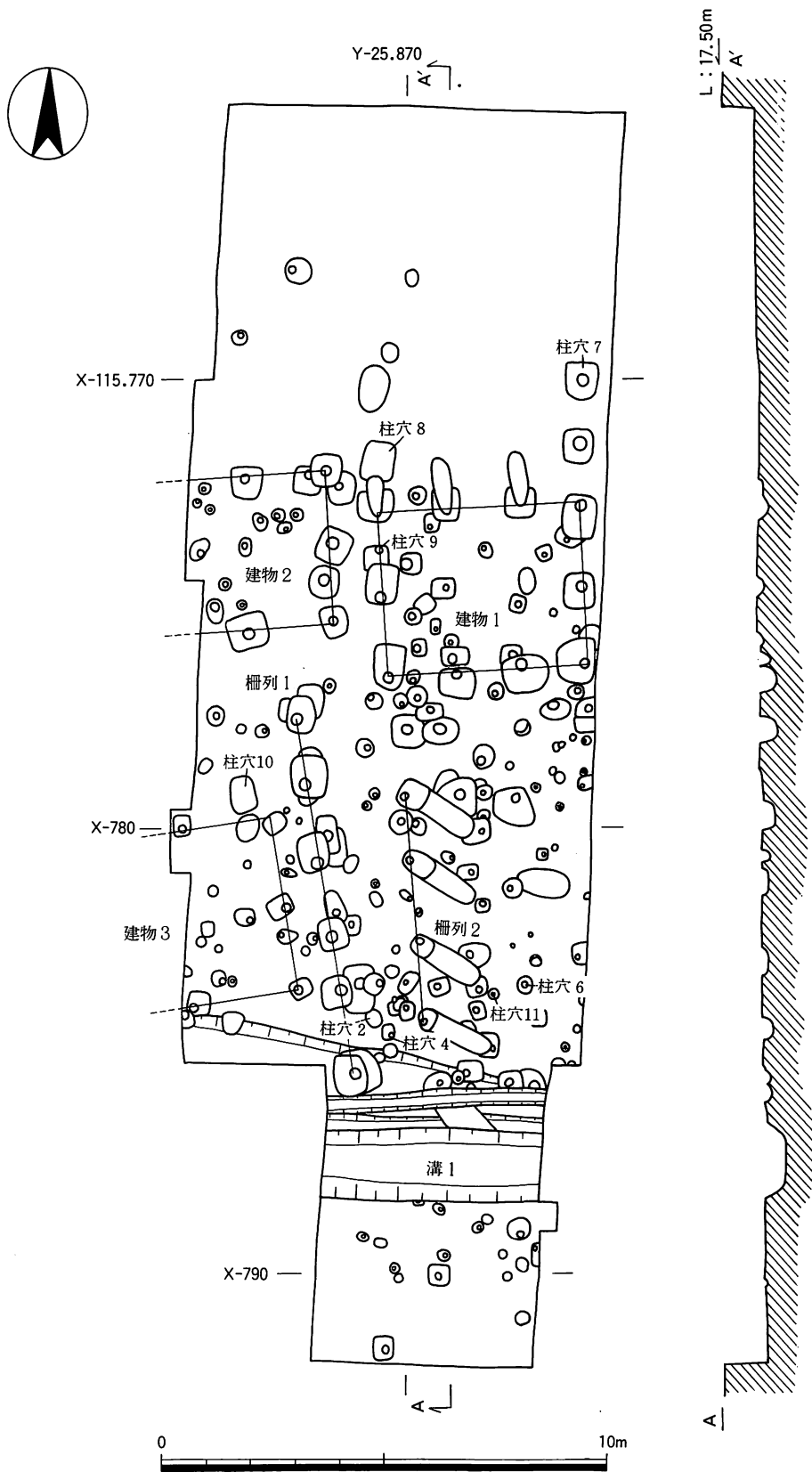
版 圖



弥生～古墳時代遺構復元図 (1 : 5000)

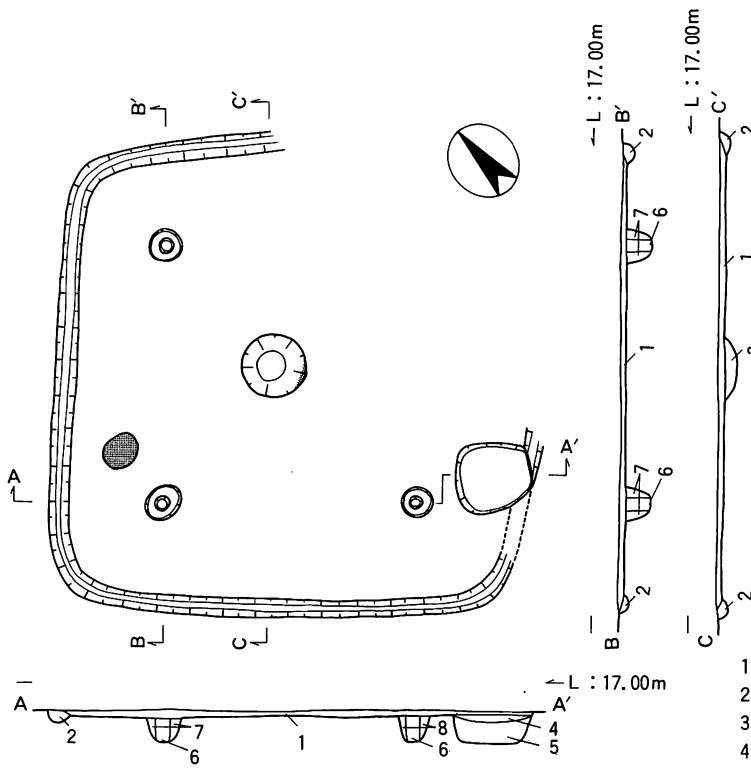


遺構実測図 (弥生~古墳時代 1 : 150)



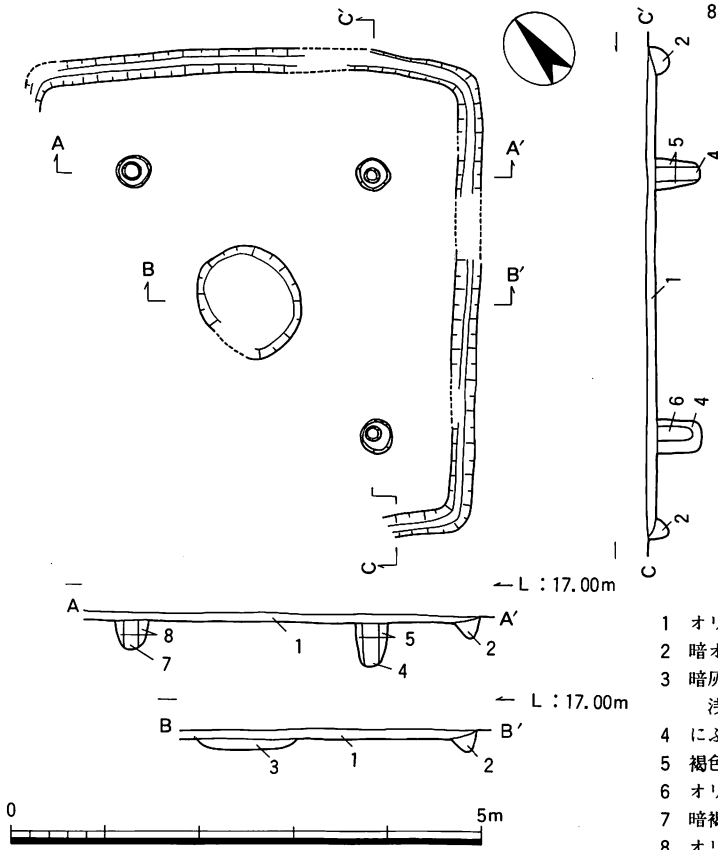
遺構実測図 (奈良～平安時代 1:150)

1号住居



- | | | |
|---|------------|-----------|
| 1 | 暗褐色泥砂 | [10YR3/4] |
| 2 | にぶい黄褐色泥砂 | [10YR4/3] |
| 3 | オリーブ褐色泥砂 | [2.5Y4/3] |
| 4 | 暗褐色泥砂 | [10YR3/4] |
| 5 | 黒褐色泥砂 | [10YR3/2] |
| 6 | 褐色泥砂 | [10YR4/4] |
| 7 | にぶい黄褐色泥砂混礫 | [10YR3/3] |
| 8 | 暗灰黄色泥砂 | [2.5Y4/2] |

2号住居

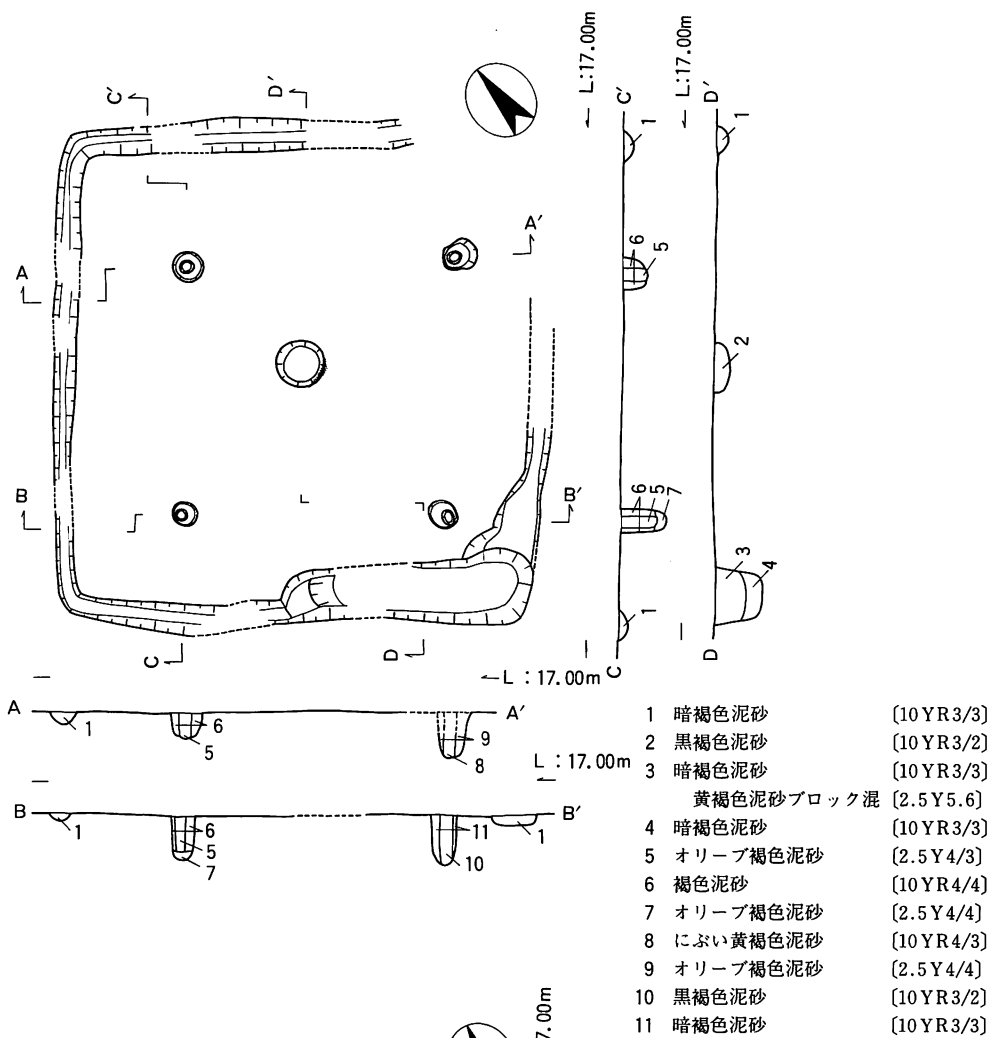


- | | | |
|---|-----------|-----------|
| 1 | オリーブ褐色泥砂 | [2.5Y4/3] |
| 2 | 暗オリーブ褐色泥砂 | [2.5Y3/3] |
| 3 | 暗灰黄色泥砂 | [2.5Y4/2] |
| 4 | にぶい黄褐色泥砂 | [10YR4/3] |
| 5 | 褐色泥砂 | [10YR4/4] |
| 6 | オリーブ褐色泥砂 | [2.5Y4/4] |
| 7 | 暗褐色泥砂 | [10YR3/4] |
| 8 | オリーブ褐色泥砂 | [2.5Y4/6] |

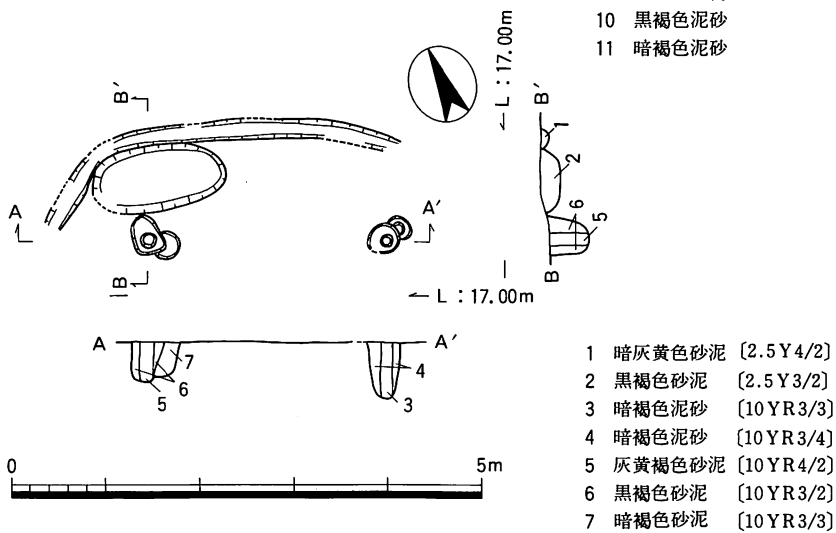
遺構実測図 (1:80)

アミ面は焼土を表す

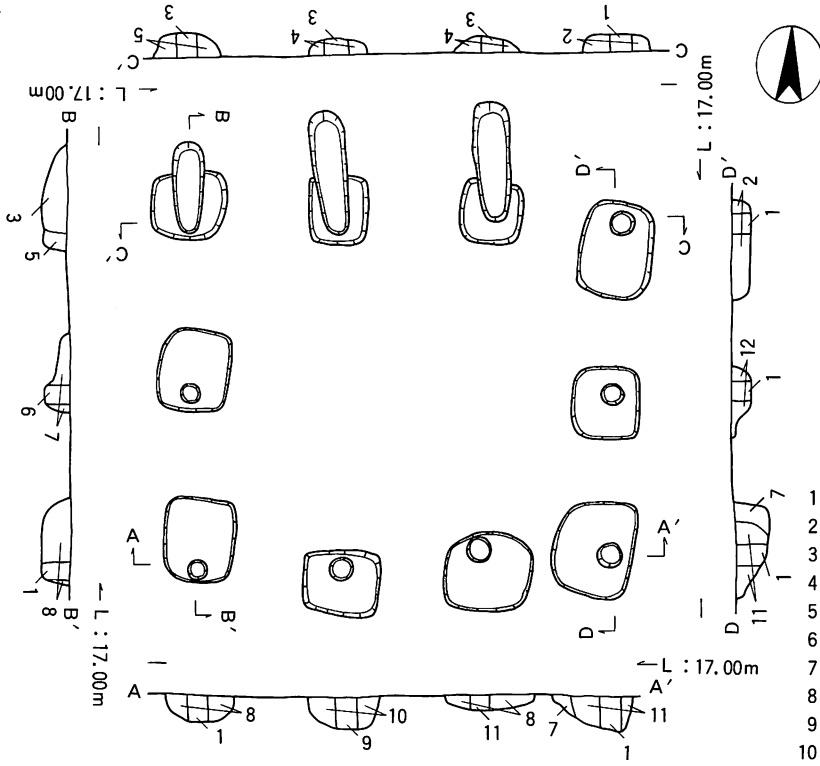
3号住居



4号住居



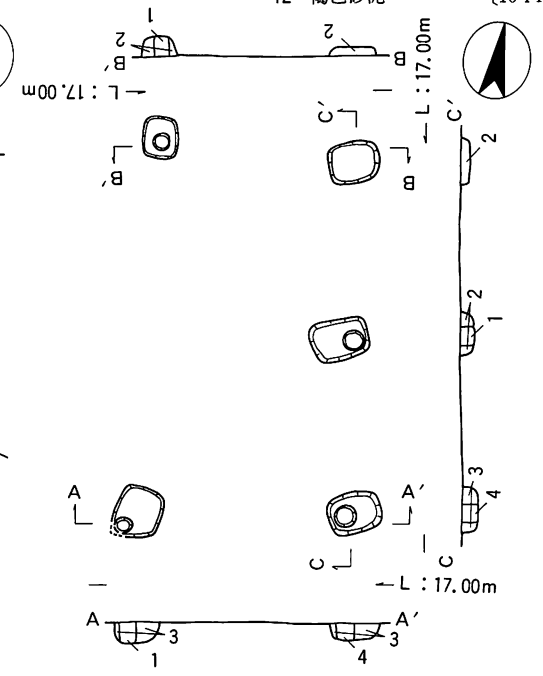
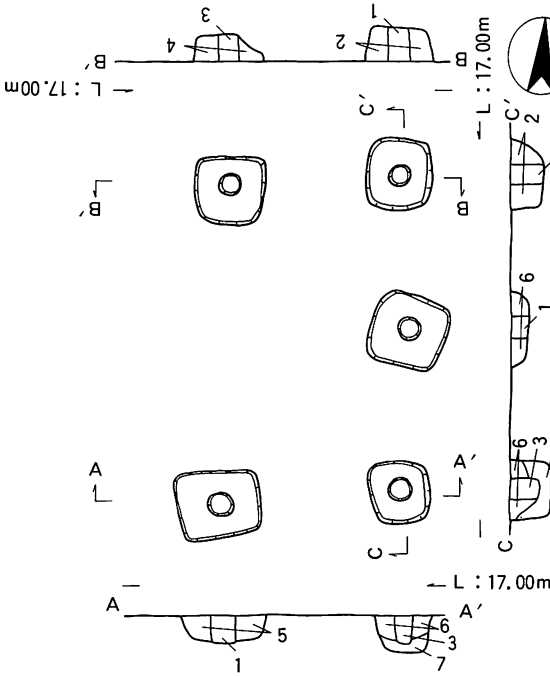
建物1



- 1 オリーブ褐色砂泥 [2.5Y4/3]
- 2 暗褐色砂泥 [10YR3/3]
- 3 暗灰黄色泥砂 [2.5Y5/2]
- 4 黄褐色砂泥 [2.5Y5/3]
- 5 褐色砂泥 [10YR4/4]
- 6 暗オリーブ褐色砂泥 [2.5Y3/3]
- 7 オリーブ褐色砂泥 [2.5Y4/6]
- 8 暗灰黄色砂泥 [2.5Y4/2]
- 9 黒褐色泥砂 [10YR3/2]
- 10 にぶい黄褐色泥砂 [10YR4/3]
- 11 暗灰黄色砂泥 [2.5Y5/2]
- 12 褐色砂泥 [10YR4/6]

建物2

建物3

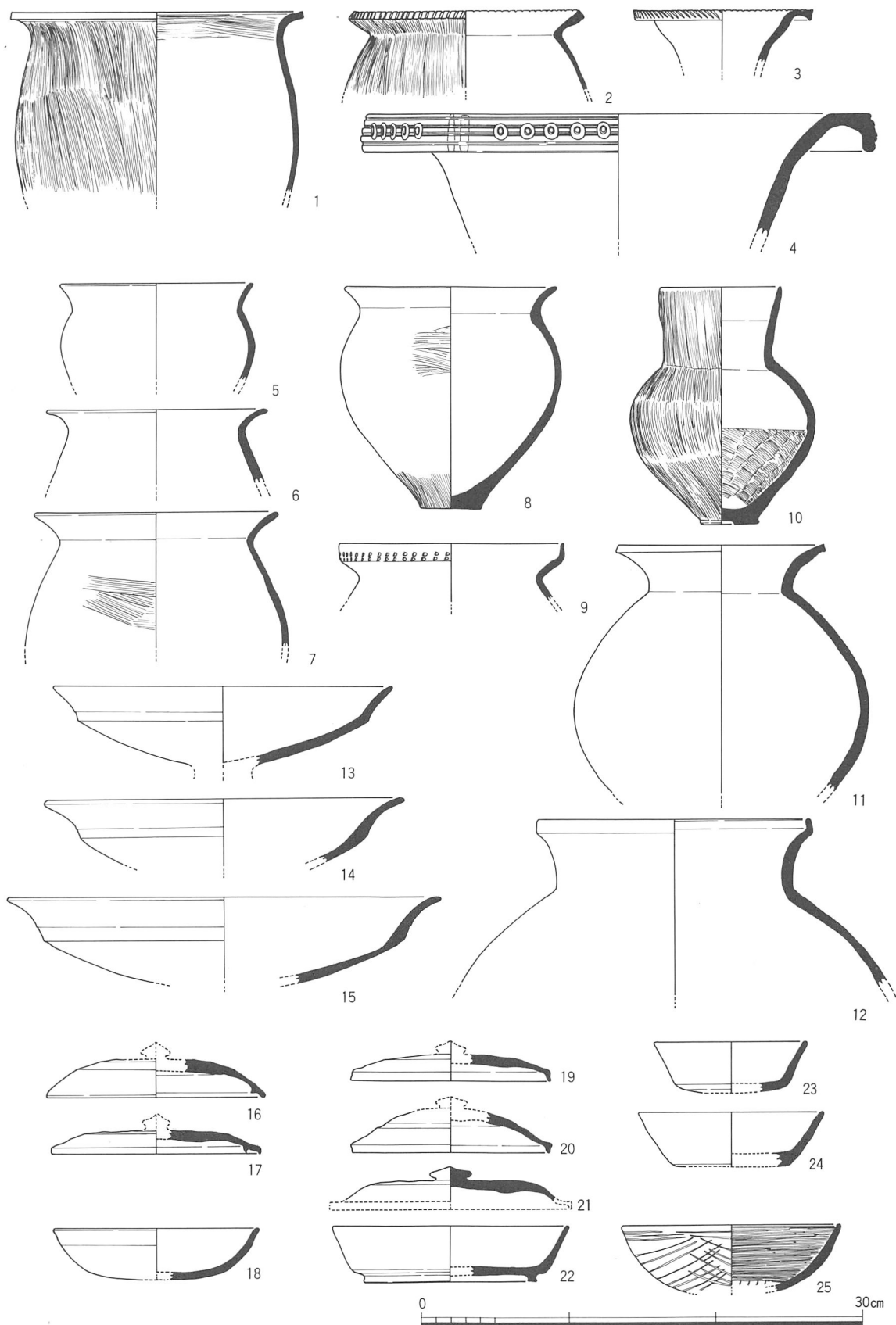


- 1 オリーブ褐色砂泥 [2.5Y4/3]
- 2 黄褐色砂泥 [2.5Y5/6]
- 3 オリーブ褐色砂泥 [2.5Y4/4]
- 4 褐色泥砂 [10YR4/6]
- 5 暗灰黄色砂泥 [2.5Y5/2]
- 6 オリーブ褐色砂泥 [2.5Y4/6]
- 7 暗オリーブ褐色砂泥 [2.5Y3/3]

- 1 黒褐色砂泥 [10YR2/3]
- 2 暗褐色砂泥 [10YR3/4]
- 3 黄褐色砂泥 [10YR5/8]
- 4 灰黄色砂泥 [10YR5/2]

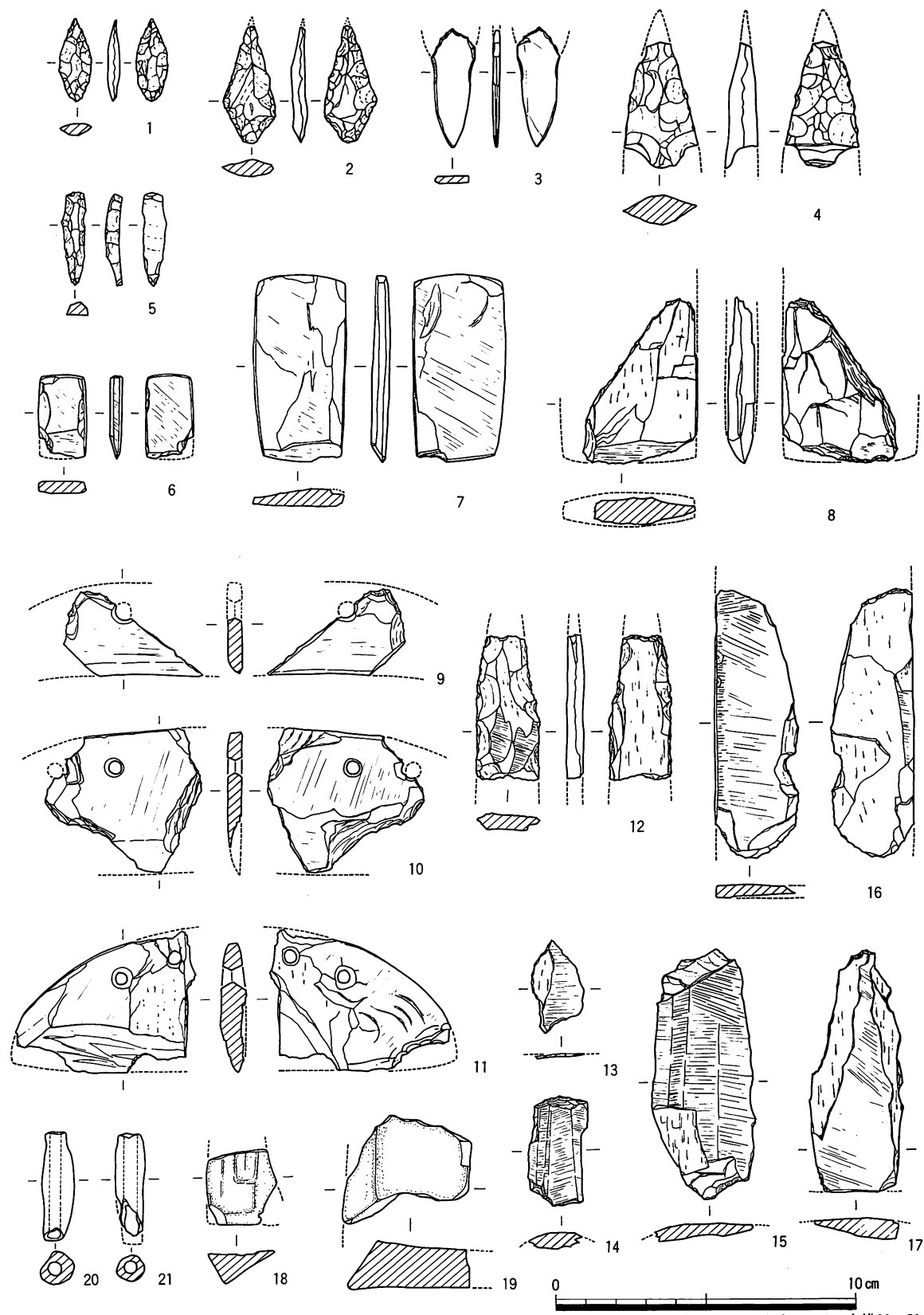


遺構実測図 (1:80)



土器実測図 (1 : 4)

弥生土器1~4, 古式土師器5~15, 土師器18, 須恵器16・17・19~24, 瓦器25



石鏃1~3, 石槍4, 石鏃5, 石斧6~8, 石庖丁9~11, 石劍12~17, 砥石18·19, 土錐20·21
 石器·土製品実測図(1:2)



1 調査区全景（弥生～古墳時代 北から）



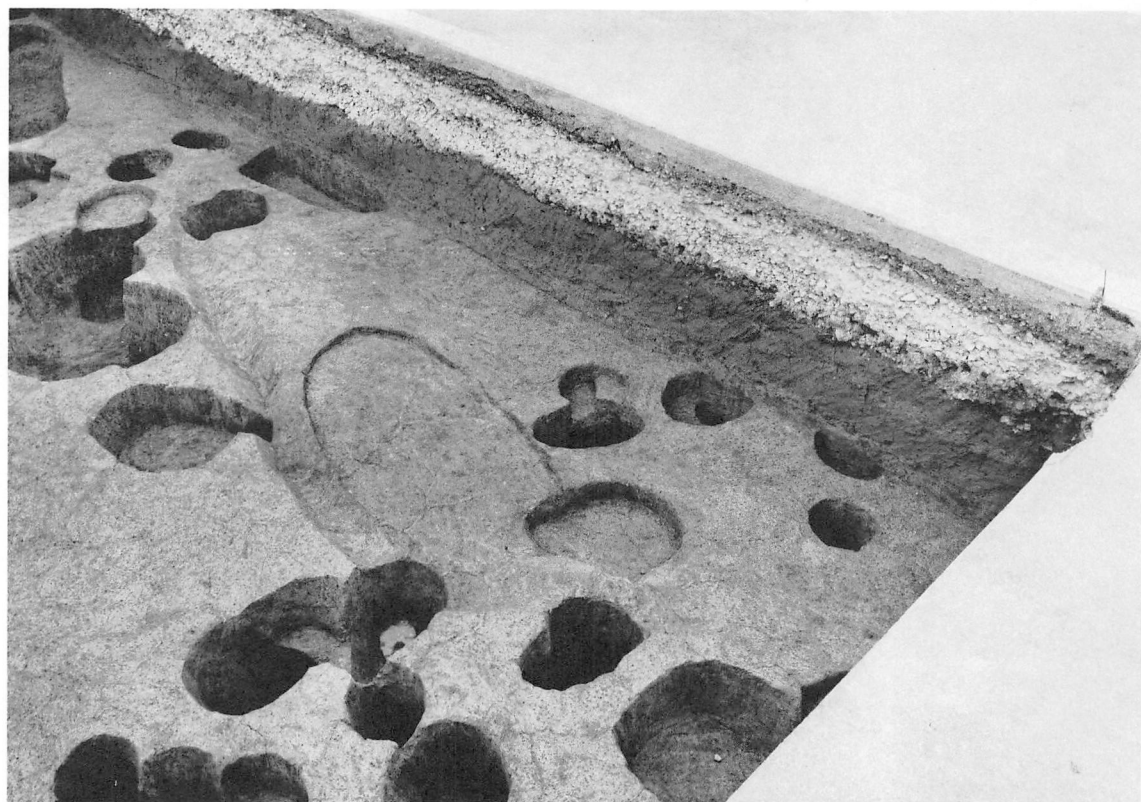
2 1号住居（北西から）



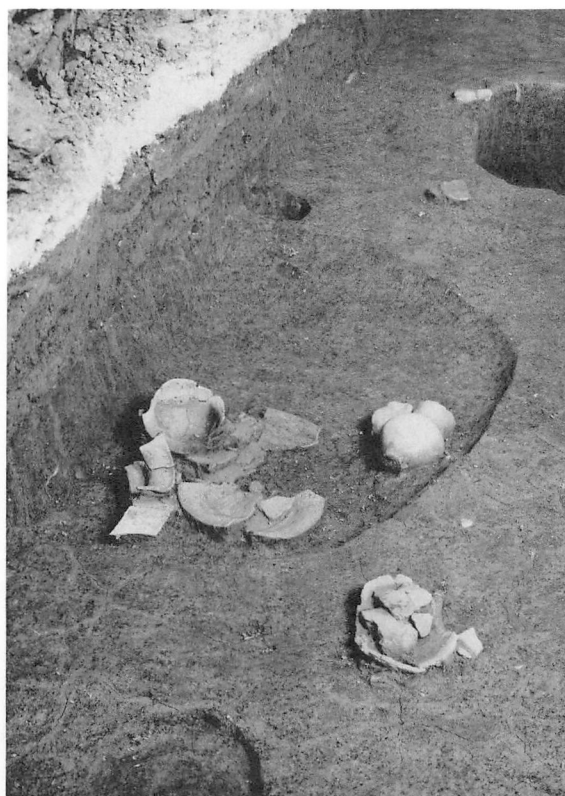
1 2号住居 (南東から)



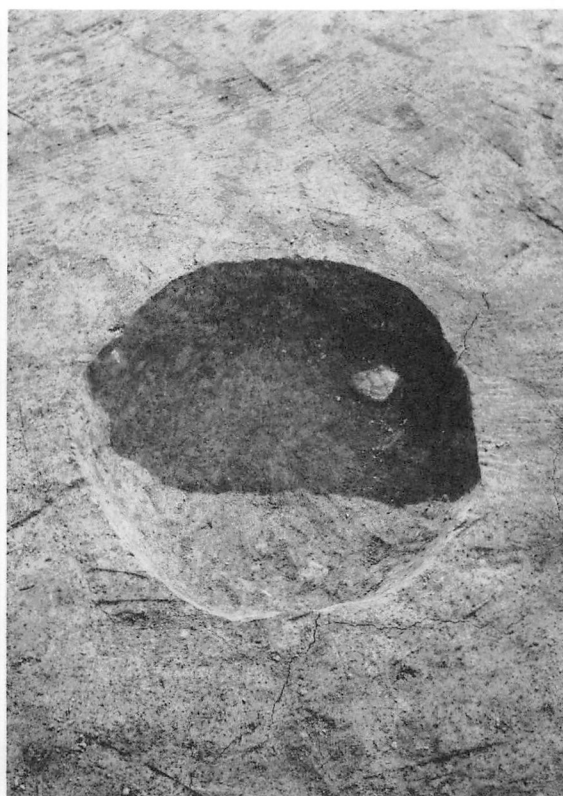
2 3号住居 (北西から)



1 4号住居（北西から）



2 2号住居中央土壙遺物出土状況
（南東から）



3 3号住居炉跡（北東から）



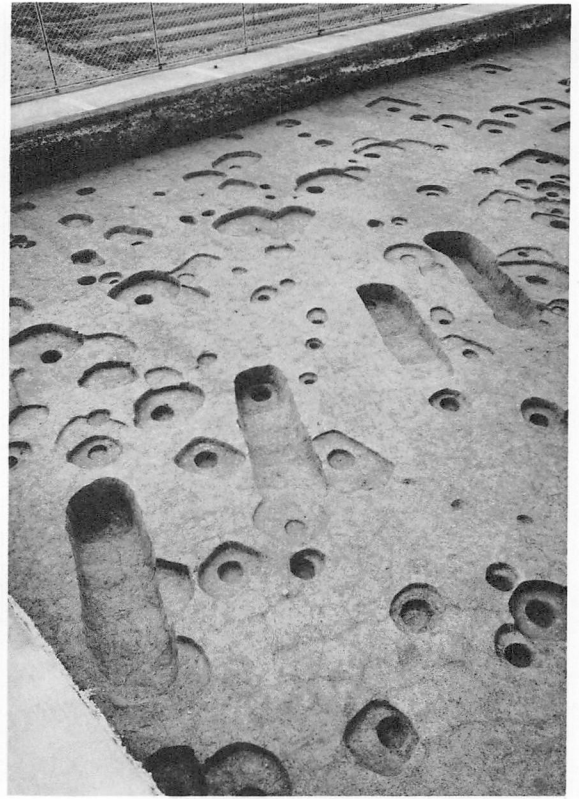
1 調査区全景 (奈良～平安時代 北から)



2 建物1 (北から)



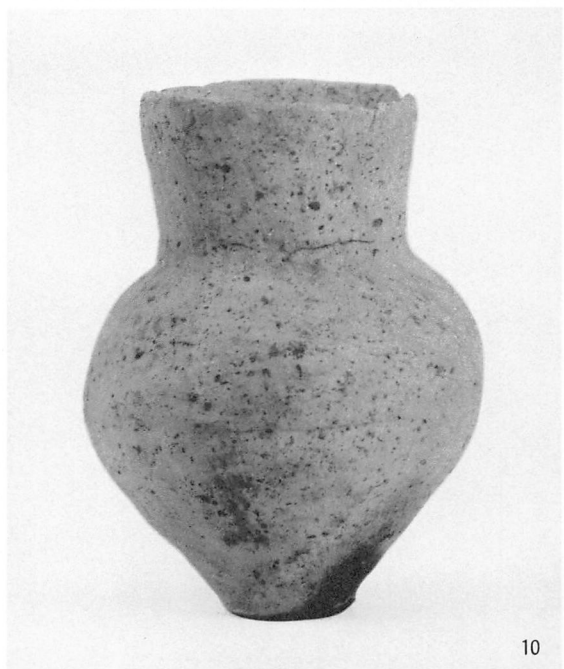
1 建物2ほか（北から）



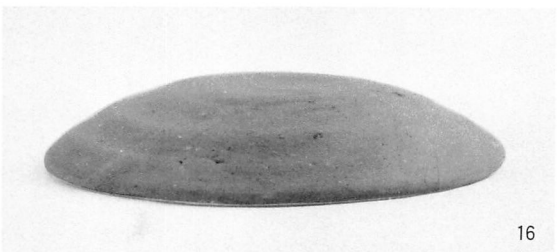
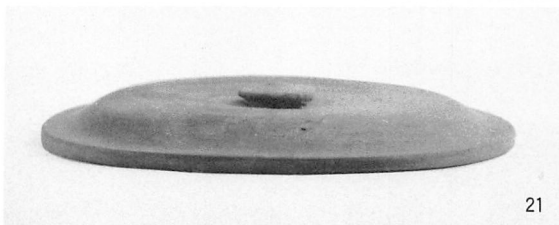
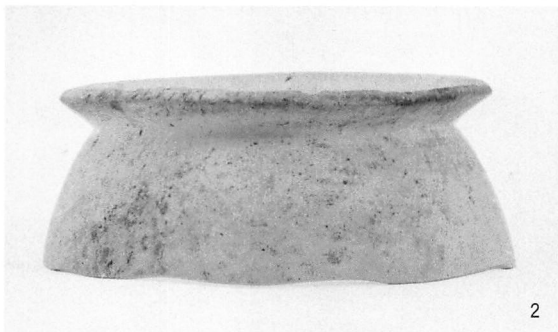
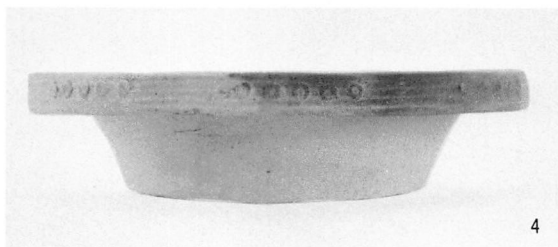
2 柵列2（南東から）



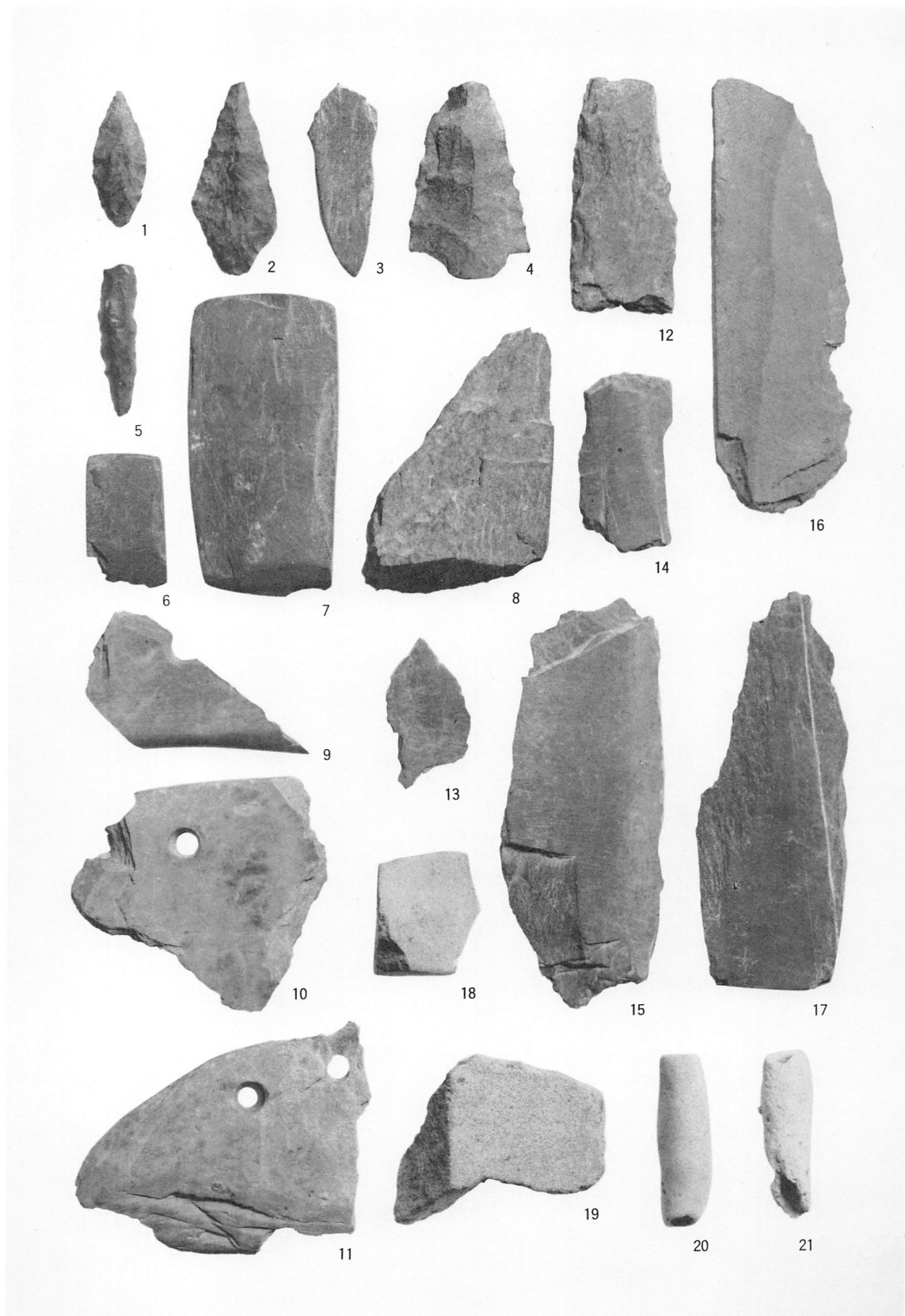
3 溝1（北から）



出土土器



出土土器



出土石器・土製品

中久世遺跡発掘調査概報

平成元年度

発行日 平成2年3月31日

発行 京都市文化観光局

住所 京都市左京区岡崎最勝寺町13京都会館内

編集 財団法人京都市埋蔵文化財研究所

住所 京都市上京区今出川大宮東入る元伊佐町

TEL(075)415-0521

印刷 真陽社